

【論文】 コロナ禍において日本語教師はどう対応したか

保坂敏子、縣正子、エルサイド祐子、小林亜希子、中村かおり、
三浦千尋、渡邊百里、ワトソン有、島田めぐみ
日本大学大学院総合社会情報研究科

How did Japanese Teachers Respond to the COVID-19 Pandemic?

HOSAKA Toshiko, AGATA Masako, ELSAYDE Yuko, KOBAYASHI Akiko, NAKAMURA Kaori,
MIURA Chihiro, WATANABE Yuri, WATSON Ari, SHIMADA Megumi
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The purpose of this study is to document what was occurring in the field of Japanese language education in Japan and abroad at the turning point of the COVID-19 pandemic. It examines the significance and limitations of online classes from various case studies. In this paper, five case studies from two universities, one vocational school, and two Japanese language schools in Japan, arising from the study, are presented

1.はじめに

2019年末から広がったコロナ禍により、世界中の教育現場では対面授業からオンライン授業への置き換えを行った。この緊急事態に際して、教師はどのように対応したのか。そして、その時何を感じたのか。post コロナはニューノーマルの時代になると言われているが、世の中が変わると、「その時」起きた出来事は忘れ去られてしまう可能性が高い。今後も震災や疫病などの災厄が日常生活を襲ってきて、教育現場はまた同じような対応を迫られる可能性がある。今回遭遇した出来事を記録し、そこで起きたことの意味を探っておくことは、今後の教育のICT化を考えるためにも、また、今後の危機に備えるためにも意義のあることだと考える。このような観点から、本稿では、時代の転換点において日本国内外の日本語教育の現場で何が起きていたのかを記録に残すこと、そして、それらの事例からオンライン授業の意義と限界について検討することを目的とする。

本研究に取り組んだきっかけは2つ挙げられる。

一つは、2020年度の本研究科博士前期課程の「言語教育工学特講」における受講生同士のピア・ラーニングである。オンライン授業への変換を迫られた現職の日本語教師である受講生たちは、インストラクショナル・デザインを学びながら、「いま、ここ」でそれぞれが取り組んでいる授業のオンライン化について、LMS上の掲示板で自然発生的に議論を始めた。正解のない暗中模索の中で各受講生が取り組んだ事例は、示唆に溢れるものであった。もう一つは、瀧川(2021)の趣旨に共鳴したことである。瀧川は、コロナ禍により大学教育で対面方式の講義が一切行われなくなった前代未聞の状況にあって、講義担当者がどのように対応し、学生がどのように反応したかを発信し、検証することの重要性を指摘している。これに賛同し、日本国内外の日本語教育現場での取り組みについて、世界各地で日本語教師として活躍する文化情報専攻の在校生・修了生と共に検討を始めることとした。このような試みは他にも散見されるが¹、本研究では、日本語教育に特化した、1教育

¹ 例えば、早稲田大学大学院日本語教育研究科では、『早稲田大学日本語教育学』第29号「大学院日本語

教育研究科における「オンライン授業」の実際」という特集を組んでいる。

機関に限らない、日本国内外の様々な事例を扱い、継続的に報告する予定である。それらの事例の中から、本稿では、日本国内の大学2件、専門学校1件、日本語学校2件の事例を順番に取り上げる。

2. オンライン授業をめぐる用語とツール

授業のオンライン化が急速に進む過程で、オンライン授業をめぐる様々な用語が飛び交った。事例の報告にあたり、オンライン授業に関わる用語に対する共通理解を構築するために、用語の整理を行う。

オンライン授業は、パソコンやスマートフォンを使いインターネットを介して行う遠隔授業のことで、第三世代の遠隔教育に位置づけられる(保坂 2020)。オンラインの遠隔授業は、教育と学習が同じ時間に行われる同期型と、違う時間に実施される非同期型に分けられる。同期型は、リアルタイムに授業を配信する「ライブ配信型授業」と Web 会議システムを使って教師と学生や学生同士がリアルタイムにコミュニケーションをとりながら授業を進める「同時双方向型授業」に分けられる。非同期型は「オンデマンド型授業」と呼ばれるが、時間の制約がないので、学生は教員がアップロードした資料や講義動画を好きな時間に学ぶことができる。文部科学省は 2020 年 3 月 24 日の通知²でオンラインによる授業の名称を「遠隔授業」という用語に統一し、「テレビ会議システム等を利用した同時双方向型の遠隔授業」と「オンライン教材を用いたオンデマンド型の遠隔授業」の2種類に分けている。しかし、新聞記事での名称調査(鈴木 2020)を行った鈴木は、同時双方向型のみをオンライン授業とし、オンデマンド型を含めない場合があると指摘しており³、注意が必要である。

表1 対面とオンラインの授業の組み合わせ

ハイブリッド型授業	ハイフレックス型授業
	ブレンド型授業
	分散型授業

オンライン授業と対面授業の組み合わせについても新たな用語が出現した。京都大学高等教育研究開発推進センターによると⁴、表1のように分類される。

この分類によると、「ハイブリッド型授業」とは対面とオンラインの授業を組み合わせた授業の総称である。そのうち「ハイフレックス型」とは、同じ授業を「対面授業」でも「同時双方向型授業」でも学生が自分の状況に応じて柔軟に選択できる形態のことである。大阪大学⁵と北海道大学⁶の定義では、対面と同時双方向のほか、同じ授業の録画をオンデマンドでも自由に受講できるものを指す。「ブレンド型」は、教育効果を考えて対面とオンラインといった異なる授業形態を組み合わせたものである。知識の獲得の時間を授業外の事前学習とし、授業内で知識の応用や発展を行う「反転授業」はこのカテゴリーに含まれる。「分散型」は学生をグループに分け、同じ回に異なる内容の授業を対面とオンラインで提供する授業形態のことである。ハイブリッド授業という言葉は、コロナ禍の前は対面とオンラインを同時に行う授業という意味合いで使用されていたが、現在では対面とオンラインを組み合わせたあらゆる形態の授業を指す用語として使われる場合が多いようである。

このほかオンライン授業では様々な ICT ツールを使用する。その中心となるのが、学習教材の配信や成績や学習記録を管理する LMS (Learning Management System : 学習管理システム) である。現在では、高機能の有料のものだけでなく、Google Classroom や Moodle など無料のものも活用されている。授業の過程で学習者同士が情報を共有するツールとして、Google ドキュメント、Google スプレッドシート、Google スライド、Padlet などが挙げられる。また、Google フォームを使うとアンケートや小テストが実施できる。同時双方向型授業においては、Zoom や Google meet、Teams などの Web 会議システムが使われる。これらはいずれも無料でも使える。

以上、オンライン授業をめぐる用語は、多岐にわ

² https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf (2021.5.5 閲覧)

³ 2021 年 12 月 4 日のオンライン中堅日本語教師研修「遠隔授業の理論と実践」での鈴木克夫氏の指摘

⁴ <https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/>

teachingonline/hybrid.php (2021.5.5 閲覧)

⁵ <https://www.tlsc.osaka-u.ac.jp/project/onlinelecture/hyflex.html> (2021.5.5 閲覧)

⁶ <https://sites.google.com/huoec.jp/onlinelecture> (2021.5.5 閲覧)

たるが、定義とは違う使い方や意味合いが異なる場合がある。また、使用するツールは日々更新されている。オンライン授業に関する用語やツールのこのような特質には今後も留意が必要である。

3.事例1：日大スポーツ科学部のケース（縣正子、ワトソン有、エルサイド祐子）

3.1 オンライン授業実施の経緯と授業の概要

スポーツ科学部には、一流のアスリートとなることを目指す、各国からの留学生が在籍している。日本語学習の場として、学生同士の交流の拠点として、2020年度、国際交流センターが設置された。しかし同年春に始まったコロナ禍の中で、活動は日本語学習に特化され、オンライン授業という形式で出発した。日本語の授業は「総合日本語」として初級から中級レベルの1~4年生11名を対象とした。目標は、日本で活動するアスリートとしてより高いコミュニケーション能力を身に付けること、専門授業において平易な日本語で自分の考えが書けることである。

3.2 授業準備と初期の問題点（縣）

授業ツールとして Zoom と LINE を使用した。最初の問題は、教師の ICT およびオンライン授業に関する知識と経験の不足であった。二番目の問題は学生のパソコン技術、及び学生寮の Wi-Fi の状況についての問題である。学生にパソコンが貸与され、Zoom がインストールされ、授業を始めることはできたが、学生はパソコン及び e メールの使用に慣れておらず、Google Classroom のシステムも理解、運用が困難だったことが後から判明した。これまでは、留学生に対し、日本人学生のサポートがあったが、コロナ禍で様々な事情が変わり、教師側も状況が想像できなかった。更に、最初は良好であった Zoom への接続が 6 月に入って悪化、学生によっては、ほとんど接続できないこともあった。その窮状を救ったのが LINE である。接続が切れた学生にはすぐに LINE で指示を出し、初級学生とは LINE 通話でやり取りするなどして授業を継続した。

最大の問題は授業デザインの難しさであった。それはコロナ禍で学生の日本語レベルの把握が困難なことに加え、オンライン化に伴って、日本語クラス

の役割が変化したことによる。当初の「学生が常時、日本語に接し学べる場所」という国際センターの役割は、オンラインの環境では実現が難しかった。学生はすべて非漢字圏出身だが、高校入学時に来日した者と大学からの入学者がおり、4 学年にわたっているため、日本語レベルは混在していた。そのため、初級と中級に分けて Zoom のブレイクアウトルームの使用を検討し、「書く」作業を中心に 2 クラスの授業を並行に組み立てた。しかし実際には学生の遅刻や Wi-Fi の不調等もあり、ブレイクアウトルームを適切に活用できなかった。そこでブレイクアウトルームの使用をやめ、授業は初級学生とのやり取りを中心に組み直した。中級学生には初めに読解、作文等の課題を与え、Zoom の音や画面を切った状態で作業を行ってもらい、初級学生が書き作業に入ったときに中級のフィードバックを行った。ただ時間の配分が難しく、中級学生が課題に取り組む前のサポートが不十分になりがちであった。初級と中級で開始時間をずらす等の工夫が必要であったかもしれない。

3.3 オンライン授業の利点と問題点（ワトソン）

オンライン授業では、YouTube にアップされているコンテンツなどを利用し、短いスキットや映像を導入部分に見せたり、Microsoft PowerPoint のスライドやアニメーションを、パターンプラクティスなどの反復練習の時に利用した。このような映像や画像を利用する方法は対面授業でも可能だが、対面授業ではコンピューターやモニターを作動させるために授業の流れを一時中断させてしまうことがあり、オンライン授業の方が、テンポよくビジュアル的に魅力のある画像を素早く提示しやすいという利点があった。また、学生が課題を提出する際には、課題を写真にとり、それを携帯の LINE で教師に送った。LINE を利用することで学生から送られてきた課題に対して教師は、すぐにフィードバックすることができ、LINE の「即時性」は有用であった。

オンライン授業の問題点としては、漢字学習の際、学生が提出してきた書き練習や課題の誤字や誤用に訂正を加えて LINE でフィードバックするのが困難であり、紙面を使ったやりとりの方がはるかに容易で、効率的であると感じた。また初級レベルの会話

練習などでは、学習者同士のインタラク션을促すのが難しく、教師が質問し、学生が答えるといった活動になりがちであった。ペアワークはもとより、グループワークなどで活発に学習者間でのインタラク션을引き出す活動を行うのが難しく感じた。対面授業でのグループ活動の場合、教師は複数のグループを同時にモニターすることができ、フィードバックを行うことができる。また学習者も質問がある時には、逐次教師に質問をすることができる。しかしオンライン授業では、Zoomのブレイクアウトルーム機能を使って会話練習などのペアワークやグループワークを行おうとした場合、教師は一つのルームの活動しかモニターできず他のペアの様子が全くわからないといった問題があった。

3.4 後期授業の状況 (エルサイド)

前期の日本語授業は Zoom による同時双方向型授業であったが、後期から、スポーツ科学部の留学生は、原則登校し、授業を受けることになった。日本語科目を担当する教員は、日本語授業を行うだけでなく、留学生の履修科目の出席や課題に関するサポートも担当する。オンライン授業だけでは、それらのサポートが困難なことが、登校することになった理由の一つである。しかし、諸事情で登校が難しい学生もあり、指導方法を工夫する必要があった。国際交流センターに登校した留学生は、Zoomで専門科目のオンライン授業を受ける学生、対面で日本語の授業を受ける学生、授業の合間の時間を利用し、専門科目の課題に取り組む学生がいた。登校しない学生は、日本語授業に寮から Zoom で参加した。センターに登校する学生は5、6名で、日本語授業に参加する学生は対面と Zoom を合わせて4名前後であった。担当教員は日本語授業を行いながら、センターで専門科目のオンライン授業を受けている学生や、専門科目の課題を作成している学生を個別に見回ってサポートした。つまり同時進行で4つの異なる学習形態が存在していた。

このような個々の学生の状況に対応するため、日本語授業ではまず全体で、オンラインと対面の双方の学生のやりとりを中心とした口頭練習や会話の授業を展開してから、学生が個別に課題に取り組む時

間を設け、オンラインの学生には質問等はチャットで送信するように指示し、課題は LINE を使い提出させた。日本語授業を受ける学生が課題に取り組む間、担当教員はそれ以外の学生のオンライン授業の課題提出のためのサポートや、課題作成の進捗を確認しフィードバックするなどの指導を行った。こういった状況に対処する必要と、日本語授業に出席する学生一人一人の日本語の習熟度も異なっていたという2つの理由から、1コマの授業内で、学生が個別に課題に取り組む時間を設定し、担当教員が時間差で対応することが必要であったが、前期授業での一つ一つの経験が新しい状況に対応するための力になったと言える。指導は一つの教室で行っていたが、国際交流センターは、3密(密集、密接、密閉)を避けるのに十分なスペースと環境が整備されており、学生が少人数であったため実現できたと思われる。

3.5 まとめ

今後も国際交流センターでは、上記と同様な状況で日本語授業を行い、日本語授業以外の留学生のサポートを行う必要があると思われる。今回の経験を踏まえて、日本語授業では、授業デザインに留意し、時間配分と課題の工夫により学生のモチベーションを落とさないように考慮する必要がある。コロナ禍で実施せざるを得なかったオンライン授業であったが、試合やトレーニング、毎日の朝練などで時間の制約や心身の負担が大きいスポーツ科学部の留学生に、その強みや利点を今後も生かせる可能性があるだろう。スポーツ科学部の留学生の日本語教育では、個々の実情に即した臨機応変な授業のデザインが求められる。それに即した教材の作成や整備について、2020年度の反省を踏まえて検討していきたい。

4.事例 2：大学での反転オンライン授業実践 (中村かおり)

大学での日本人と留学生がともに受講する一般科目授業において、授業内での対話を目指した反転オンライン授業の取り組みについて報告する。

4.1 授業の概要

実施機関：日本の私立大学

対象者：大学学部生（日本人／留学生）46名

科目名：日本語教育概論

授業の目的：日本語教育に関連したさまざまな分野を概観し、今後の専門的な学習に向けての方向性を探索するために視座を高めることを目指した。

使用したツール：Microsoft Teams、Zoom および Google スプレッドシート、Google フォームを用いた。特別授業週（計2回）には対面でも授業を行った。

4.2 オンライン授業を始めた経緯

コロナ感染拡大により当該機関の2020年度の対面授業は基本的に中止となった。授業形態はオンデマンド、同時双方向型授業（以下「ライブ授業」と略述）のいずれかが選択できた。この科目は講義によって得た知識を話し合いで深めるため、オンデマンドによる予習とライブ授業を組み合わせたオンライン授業を反転授業形式で行うこととした。

4.3 オンライン授業の特徴

対面授業を想定したシラバスでは、授業内で講義と話し合いを行い、事後課題としてコメントシートを提出させることにしていた。しかし、ライブでの講義は学生の理解が進まず、話し合いも時間がかかると言われており、かつ接続時間をなるべく短くするという大学からの要請もあり、内容を削減しなければならないことが予想された。そこで、反転授業の形式を取り入れ、「資料視聴・プレ課題→ライブ授業→ポスト課題」という流れに変更した。

授業では、まず事前に講義に該当する資料を視聴したのちにプレ課題に取り組みせ、ライブ授業でその課題に基づいて話し合いができるようにした。学生には、Teams で配布した音声付きの Microsoft Power Point 資料を視聴した上で、プレ課題を授業前日までに提出するよう求めた。例えば、多文化共生社会について考える回では、その概要と「やさしい日本語」の生まれた背景、そのルールなどに関する説明資料を視聴させた。そして、プレ課題ではそのルールに基づき、350字程度の文章を「やさしい日本語」に変換するよう指示した。資料の音声は約20分で、ライブ授業終了時に、次週の資料とプレ課題

を配布した。

ライブ授業は Zoom で行った。授業では、配布資料についての内容確認・質問等を行った後、4人程度のグループに分かれてプレ課題についての話し合いを行った。その結果は Google スプレッドシートに書き込ませ、全員が互いの進捗を見られるようにした。「やさしい日本語」の回では、各グループで各自が書いた文章を共有しながら、最もわかりやすいと思われる文章の一つを選ぶか、あるいはさらにわかりやすくするために、いくつかを組み合わせたり、全体的に書き直したりしたものをスプレッドシートに書き込んでもらった。その後、全体で共有し、最もわかりやすいものについて投票を行い、上位2つの文章についてなぜわかりやすいかについてさらに話し合いを行った。最後にまとめとして授業全体を振り返り、学生からの質問を確認した後、ポスト課題がある場合はその説明（主に Google フォームの URL 提示）と、次回の資料とプレ課題の確認を行った。

4.4 評価

対面授業では、授業への参加度、授業後のコメントシートおよび学期末の試験で評価を行う予定であった。しかし、オンライン授業では、プレ課題への取り組みと学期末レポートで評価した。プレ課題を評価の対象にしたのは、接続環境などによりライブ授業に参加できない場合や、家庭環境などで発言がしにくい学生が不利にならないようにという配慮と、ライブ授業中の参加度や理解度が評価できないためである。そして、さまざまな資料を参照することを前提に、学期末試験ではなくレポート課題を課した。

4.5 授業の結果

学生の反応を最後の授業での振り返りから見ると、反転形式は概ね好評であった。事前に配布された音声付きの資料があったことで、集中できるときに自分のペースで調べながら学習していったため内容理解が深まり、それによって話し合いが充実したという声が多くあった。この点は、留学生だけでなく日本人学生も同様であった。また、プレ課題があったことで、資料を視聴する際に重要なポイントがつかみやすく、話し合いの準備としても役立ったという

意見があった。そして、非常に多かったのが、話し合いが充実していたという意見である。プレ課題で一人で考えたことを他の学生と共有してみると、まったく異なる見方や考え方があることに強く心を揺さぶられたという感想が多くあった。話し合いを経て、次の課題への取り組み方が変化したという意見もあった。

一方で、課題の質を上げようとするほど学習時間が長くなり、常に課題に追われる状況になったという指摘もあった。学生らはこの授業以外にも多くの授業を履修しており、それぞれの質を上げたいと思えば、取り組み時間も乗じて必要になるため、負担が増したという。

教員の立場から振り返ると、学びという点では深まりがあったと感じる。一人で課題と向き合い、それを他者と共有して多角的に検討し、次の課題ではそれらを振り返りながら取り組むというサイクルができ、相互の学びをさらに深めるよい相乗効果が生まれていたと思われる。その効果はプレ課題や学期末レポートへの取り組みを見ても顕著であった。

しかし、声を上げない学生に対してのアプローチが難しくなり、学生間のレベル差が開いたと感じる。カメラをオフにしていると、理解度や思考が見えず、理解が不十分な学生へのフォローが難しかった。それを補うためにプレ課題では全員分に目を通し、一人一人にフィードバックを行ったが、対面でのやりとりに比べて十分ではなかった。そして、きめ細かな授業展開のために負担が増した。授業前の資料作成、資料への音声の挿入、プレ課題のチェックとフィードバックなど、ライブ授業を行うまでの準備量が膨大であった。さらに、学生と Teams でつながっていたため、従来は授業中に質問し、共有できていたようなこともチャットを通じて個別に聞かれることが増え、こうしたことへの対応も必要であった。

4.6 まとめ

総合すると、反転オンライン授業では、学生には一人で理解し考えるという時間がしっかりと確保されており、それを基礎にして学習が進められたため、これまでの授業よりも学びが深められたという利点があった。また、教員にとっても、資料作成時にこ

れまで以上に学習内容を精査し、各回の目標を設定し、目標までにすべきことを整理した上で段階的に示すように心がけたことで、大きな学びがあった。しかし、対面ならわかる学生の反応や理解度を文字からしか得られなくなったことと、常にパソコン画面と向き合うようになり、ワークライフバランスをとりにくくなったという課題もあった。

今回の実践で反転授業の効果と課題が確認できたため、今後は対面授業にも取り入れていきたい。しかし、今回の形式をそのまま取り入れることは難しいだろう。ライブ授業と対面授業とでは、課題と授業との時間配分、話し合いの際のグループ間の移動とスムーズさ、授業中の情報共有の方法、教員からのフィードバック方法等が異なるためである。今後は、オンライン授業だけでなく、対面授業や、対面授業とオンライン授業を行き来する状況下においても、効果的に展開できる反転授業の方法を考えることが課題である。

5.事例 3 : Microsoft Teams を利用したプレゼンテーションのブレンド型授業 (三浦千尋)

2020年4月、緊急事態宣言が発令されたことを受け、本校(専門学校)では2020年度の授業開始が5月11日に延期された。授業開始後は、Microsoft Teams (以下、Teams) を使ったオンライン授業と対面授業を合わせた「ブレンド型授業」を採用した。ここでは、ブレンド型授業で行ったプレゼンテーションの授業について取り上げる。

5.1 オンライン授業に向けての学生側の準備

2020年4月は全面休校になり、学生は登校ができなくなったため、新年度で使用するテキストは学校から学生に郵送した。その中に、Teams のインストールの説明書、個々のログインIDとパスワードが記載された紙を同封し、学生にパソコンまたはスマートフォンに Teams をインストールさせた。ログインが確認できない学生には、電話をかけてインストールのサポートを行った。その後、オンライン授業リハーサルの日を設け、ライブ配信の視聴、カメラやマイクのオンとオフ、コメントの送信方法などを確認した。

5.2 プレゼンテーションの授業

5.2.1 プレゼンテーションの授業構成

プレゼンテーションは、1コマ90分で、全30コマの授業である。授業は、次の1から6を繰り返す構成になっている。

- 1.テーマの提示
- 2.原稿およびスライド作り
- 3.添削
- 4.練習
- 5.プレゼンテーション実施
- 6.学生間での評価

1から6のうち、5を対面授業に設定し、1から4、および6をオンラインで行った。

5.2.2 プレゼンテーションの授業実施

(1)テーマの提示（オンライン）

Teams上でMicrosoft Power Point（以下、PPT）を画面共有し、プレゼンテーションのテーマを提示した。また、そのテーマで必要になる表現、語彙なども併せてPPTにまとめた。

(2)原稿およびスライド作り（オンライン）

各自、Microsoft Word（以下、Word）やPPTを使って作業を行った。作業中はオンライン状態にしたうえで、マイクをミュート、カメラをオフにした。質問があれば、学生はマイクをオンにして、直接教師に質問したり、チャットで質問事項を打ち込んだりした。適宜、教師からも学生に声をかけ、進捗を確認したり、指導を行ったりした。

(3)添削（オンライン）

ファイルの添削は、Teams上に提出用フォルダと添削済フォルダを作成して行った。学生は締切までに提出用フォルダにファイルをアップロードする。教師は提出されたファイルをダウンロードし、コメントや修正を加えたら、そのファイルを添削済フォルダにアップロードする。学生は添削済フォルダから添削された自分のファイルをダウンロードして、添削された箇所を確認した。

(4)練習（オンライン）

練習では、教師と学生が1対1で指導を行えるように、2つの会議を使用した。Teamsは、会議を複数開催できるので、学生全員が待機するメインの会議と、練習用の会議を立ち上げる。教師と練習を行う学生は、練習用の会議に入り、練習を行う。練習が終わった学生は、メインの会議に戻り、次の学生を呼ぶ。学生全員の練習が終わったら、教師はメイン

の会議に戻る。待機している学生は、個人練習をしたり、原稿や資料の修正を行ったりしていた。

(5)プレゼンテーション実施（対面）

対面でプレゼンテーションを行う。プレゼンテーションの様子は、振り返りのために録画しておく。

(6)学生間での評価（オンライン）

実施したプレゼンテーションの自己評価と、学生間での評価を行った。録画しておいたプレゼンテーションをTeams上にアップロードし、学生はそれを見ながら、同じくTeams上にアップロードされた評価シートを入力していった。

5.3 まとめ

5.3.1 オンライン授業の良かった点

Teamsを使用したオンライン授業で良かった点は、3点ある。1点目は、画面共有ができる点である。教師が学生に対し使用する資料だけでなく、学生の成果物もクラスで簡単に共有することができた。2点目は、複数の会議が同時に立ち上げられる点である。複数の会議を立ち上げることで、前述したプレゼンテーションの練習のように、メインの授業を継続しながら、個別指導ができた。また、この機能を使って、グループ作業も行うことができた。3点目は、課題の管理がしやすい点である。Teamsには「課題」という機能がある。この課題機能では、学生の課題の進捗、提出状況が一覧で確認でき、コメントを付けて課題を返却することもできる。複数の授業を担当していると煩雑になりがちな課題の管理も、この課題機能を使うことにより、簡単に行うことができた。

5.3.2 オンライン授業の問題点

オンライン授業の問題点は、学生の様子が見えない点である。学生の表情を見たり、机間巡視で進捗を確認したりすることができないため、授業者の予想以上に学生が理解していない、成果物が完成できないということがあった。特に、消極的な学生や、常に教師の声掛けが必要なモチベーションがあまり高くない学生は、そういった傾向が強かった。また、生活音や他人の話し声がマイクに入ったり、音がハウリングしたりするなど、ルームシェアをしている学生が多い留学生ならではの問題も起こった。

5.3.3 学生の反応

学生に好評だった点は、スライドなどの資料が手元ではっきりと見ることができる点である。また、必要なところをスクリーンショットして残しておく点も、便利だという声が多かった。さらに、本校ではオンライン授業を録画し、公開していたため、授業でわからなかったところをあとで確認することができるという点も好評であった。一方、質問をしたいときにすぐに質問ができない、通信の状況によって聞き取りづらいときがある、という声もあった。

5.3.4 プレゼンテーションのブレンド型授業

プレゼンテーションの授業をブレンド型授業向けに構成するにあたり、まず考えたのは、どの授業項目を対面授業にするかである。今回は、学生に緊張感を持たせたいという理由で、プレゼンテーションの実施を対面授業にすることにした。対面授業当日、学生は緊張感を持ってプレゼンテーションが行えただけでなく、お互いの表情や動き、思わず漏らした笑い声など、発話者以外のカメラとマイクをオフにしているオンラインでは感じることはできない空気感を感じることができた。一方、オンラインで行った授業項目については、原稿およびスライド作りと添削において、課題が残った。対面授業であれば、学生が作成している原稿やスライドの修正点を適宜指導できる。さらに、日本語の文法や語彙の間違いを修正するだけでなく、何が言いたいのかを学生に確認しながら、適した表現を教えることもできる。しかし、オンラインでは作業中の指導が困難なため、提出された原稿は、修正箇所が非常に多いものや、内容そのものが理解できないものがあつた。

ブレンド型授業において、どの授業項目をオンラインするか、対面にするかは非常に重要である。オンラインと対面の学習効果の違いを調査、分析し、それをもとに学習効果の高いブレンド型授業を今後も提案していきたい。

6.事例 4: 新宿日本語学校におけるオンライン授業実践報告—オンライン授業のための裏方話を中心に— (渡邊百里)

2019年年末より世界中に広がった新型コロナウイルスの感染拡大防止対策 (以下、コロナ対策) の一

環で、筆者が勤める学校法人江副学園新宿日本語学校 (以下、SNG) では、2020年3月2日より、急遽オンライン授業を実施することとなった。本稿では、オンライン授業開始にあたり、学校がどのような準備を行ったかという点を中心に報告する。

6.1 新宿日本語学校について

SNGは、1975年創立の東京都新宿区にある日本語学校である。学生は毎年平均600名程度で、約50か国から集まっている。「江副式教授法」という、日本語の文の構造を可視化して教える独自の教授法により日本語教育を行っており、その教授法を活かした「VLJ (Visual Learning .Japanese)」(NTTコミュニケーションズ (株) との共同開発) というブレンド学習システム (eラーニングとスマホアプリ教材) を2013年より初級クラスに導入している。また、2017年にGoogle社の旧称G Suite for Educationに登録し、全学生及び教師がGoogleアカウントを持てるようにした。それ以降、Google Classroom (以下、Classroom) や、Google フォーム等を授業で活用している。

6.2 オンライン授業実施の経緯

コロナ対策のため、文部科学省より2020年2月28日に全国の国公私立小学校、中学校、高等学校等に対し、一斉臨時休業要請が出された。これを受け、SNGでは、「学生の学びを止めてはいけない」という考えのもと、休業はせず、従来の授業時間帯にオンラインで同時双方向型授業を実施することに決めた。

6.3 オンライン授業実施の準備

6.3.1 インターネット環境等調査、教師研修の実施

臨時休業要請が出された2月28日に、全学生及び教師に対し、インターネット環境の有無と端末の調査を行った。その結果、学生はオンラインで授業が行える環境が整っていることがわかった。環境が整わない一部の教師には、学校からPC等を貸し出した。また、同日、いくつかのクラスでGoogle Meets (以下、Meet) を使った実験的な授業を行い、3月2日、3日には、Meetでの校長による全学生対象オンライン漢字授業を行った。その2日間、教師に対しては、Meet、Classroom等の使い方の研修会を実施し

た。この研修会には全教師が参加した。その後も、各種アプリケーションの使い方等について何度も研修を行い、研修録画データも共有した。

6.3.2 オンライン授業用の教科書・副教材

オンライン授業が開始された2020年3月は、学期の途中だったため、学生は教科書・副教材を持っていた。しかし、今後のことを考え、教材をデータ化することにした。SNGでは主に独自開発した教科書や副教材を使用しているため、すぐにデータ化することができた。そして、著作権表示のために、教材データの全てのページにウォーターマーク（学校の名前やロゴなどの透かし）を貼り込んだ。また、どのようにしたら教師がデータにアクセスしやすいかという点に配慮し、Googleドライブにオンライン授業用のフォルダを作成しデータを保存した。そして、学生には、各クラスのClassroomにデータをアップロードし、いつでも閲覧できるようにした。

6.4 オンライン授業概要

3月4日より、各クラスでオンラインでの同時双方向型授業を開始した。授業では、主にClassroomとMeet、Googleスライド（以下、スライド）等のツールを使用している。まず、教師は授業前に、Classroomで、授業で使用するMeetコードを学生に知らせる。また、教材や小テストなどもClassroomに配信する。そして、授業時間になったらMeetに入り、出席確認をしてから授業を行う。多くの教師はスライド等で作成したスライドを画面共有しながら授業を行っている。授業後は、その日のまとめや宿題をClassroomから配信し、学生との双方向のやり取りを行っている。授業中は、教師も学生もカメラをONにする、教師は学生を2回以上指名する等、授業ルールも設けたが、ルール通りにはいかない状況もあった。

6.5 試験と評価

2020年冬学期（1月から3月）は、オンラインでの試験作成や評価基準などを決める時間がなかったため期末試験を行わず、中間試験と普段の授業の様子、課題提出などにより評価を行うことにした。しかし、学生からは期末試験を実施してほしいという意見が複数あったため、2020年春学期（4月か

ら6月）は試験を実施することにした。オンライン用試験の作成にあたっては、学校から教師に、オンラインでの試験は学生も教師も初めての試みであり、不正受験対策も十分でないこと等を考慮し、従来の試験よりも難易度を下げ、技術的にも簡素化するよう伝えられた。また、評価基準も、筆記試験の比重を従来より軽くし、授業内での発表や、課題提出などに比率を分散させることにした。しかし、この基準には教師間で賛否両論があり、これを機に、評価に対する考え方や方法を見直すことになった。

6.6 学期末アンケート

SNGでは、毎学期末に学生と教師に対し授業についてのアンケートを行っている。2020年冬学期のアンケートでは主にオンライン授業について質問をし、360名の学生から回答があった。その結果、臨時的オンライン授業について、約7割が「満足」「とても満足」と答えていた。また、同じく約7割が、オンライン授業のメリットとして、通学時間の節約や感染の心配を回避できる点を挙げており、約5割の学生は、デメリットとして、人と直接会えない点を挙げていることが明らかとなった。一方、教師用アンケートでは60名の教師から回答を得た。全体の約6割はオンライン授業について「また機会があればやってみたい」、「楽しかった」と肯定的に捉えていたが、同様に約6割は「オンライン授業は疲れた」と答えており、初めてのオンライン授業に新鮮さとともに疲れを感じる教師が多いことがわかった。また、「授業準備に時間がかかった」といった意見も多数あった。さらに、オンライン授業で工夫した点については、授業の資料を作成する際、イラストを多く入れたり、文字を大きくする等、視覚的な工夫をしている教師が多かった。また、学生の発話時間を多くしたり、気分転換にクイズをする等、学生を飽きさせない工夫も多く見られた。

6.7 まとめ

SNGがわずか数日でオンライン授業を全クラスで開始できたのは、コロナ禍以前からデジタルコンテンツの使用に慣れており、全学生及び教師がGoogleアカウントをすでに持っていたことが理由として挙

げられる。また、全教師がオンライン授業実施に対し前向きで、学校全体で同じ方向を向いて動けた点も大きな要因だと考えられる。しかし、手探りでオンライン授業を実施せざるを得なかった現場の教師、参加せざるを得なかった学生の苦労は計り知れない。また、教室という空間で感じていた学生の様子は、教師が授業をする上で極めて重要な情報であったことを改めて認識させられた。今コロナ禍で語学教育におけるオンライン授業のメリット、デメリットが徐々に整理されつつあるが、課題も多く残されている。より学習効果の高いオンライン授業を行うためには、オンライン授業に関する多くの情報を集結し、整理していくことが重要だと考えられる。この記録が、今後の日本語教育におけるオンライン授業の発展に資することを願っている。

7.事例5：コロナ禍における学校の取組み（小林亜希子）

7.1 オンライン授業が始まるまで

2020年2月27日、日本政府は全国の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校に対し、3月2日から春休みまで臨時休業を要請した。筆者の勤務先である学校法人石川学園横浜デザイン学院（神奈川県横浜市、以下、YDC）もこの要請を受け臨時休校の措置を取った。先が見えない状況の中、進学就職の準備を控えた在校生を今後どのように指導していくのか、学校全体で試行錯誤する日々が始まった。

YDCは、専門学校、高等専修学校、日本語学科の3つの課程を擁する。各クラスの学習進度や教材はカリキュラムに沿って担任が決定するが、授業内で用いるワークシートの選定や指導法に特別な決まりはなく、担任含め5名の講師が連携し授業を進める。美術系大学・大学院や専門学校に進学を希望する学生が多く、自己表現力を養うことを目的としたドラマの撮影や中華街での食レポ体験、SDGs（持続可能な開発目標）に関連した高校生との交流等、教科書以外の活動に積極的に取り組んできた。3月に始まった休校措置は通常授業（対面授業）だけでなく、これらの活動も不可能となる。学生の学びの場と時間を確保すること、そして学校と学生はいつでも繋がっているということを意識させ、安心してもら

ことを目的に Zoom によるオンライン授業の提案が出され、実践に向けて早急に準備が進められた。本稿では、報告者が担当したクラスと学校全体で取り組んだ活動事例について報告する。

7.2 オンライン授業の開始と問題点

報告者の担当クラスは、休校措置が取られる前年の2019年に入学した非漢字圏出身の学生で構成されていた。来日時点で多くの学生が平仮名やカタカナも十分に習得できていない状態であったこと、正確に確実に学びたがる学生が多くいたこともあり進度の遅れが見られたが、授業で積極的に発言する活気に溢れたクラスだった。

対面授業とウェブクラスで最も異なった点は授業時間である。対面授業時は1コマ45分×4コマが週5日あったが、ウェブクラスを開始するにあたり、「ウェブクラス2コマ+課題2コマ」の基準が設けられた。これは、授業準備を行う教師と授業を受ける学生の集中力を考慮して定められた。筆者のクラスでも2コマはオンラインで、残りの2コマは課題に取り組む時間に充てた。従来の授業では4コマの中で学生の反応を見ながら授業を進めてきたが、ウェブクラスではその時間は半分になった。指導時間が短縮されると、当然進度も遅れる。一方、Microsoft Power Point を使用した授業用教材の準備には大変な時間を要する。これ以上の遅れは避けたかったが、各教師の負担を軽減することを最優先し、無理のない範囲で準備ができるよう予定を組んだ。YDCに限らず、国内の日本語教育機関で教える教師はバックグラウンドも年齢も様々で、当然ICTスキルにも個人差がある。教育を提供する場が教室からパソコンへ変わったことで相当な負担を感じる教師や、通常授業と遜色無い質の高い授業を目指すあまり、準備に追われ疲弊する教師もいた。報告者自身、苦手意識のあるICTを覚え続ける「学び」と、学生に対して行う「教え」を同時進行させることは想像以上に負担となっていった。

ICT教育に対する焦りと不安を感じていた頃、鈴木（2020）の「平時に戻るまでの遠隔授業のデザイ

ン7か条⁷にある「無理はしない」「同じ形ではなく同じ価値を追求する」「大切なのは学生が学び続けること」の提言は報告者にとって救いとなった。ICTスキルを急激に伸ばすことは考えず、まず機器の操作に慣れ、見やすさ・わかりやすさを重視した教材作成を心がけた。最も配慮した点は声の大きさや話し方である。オンライン授業では特に明瞭な発音と活気のある話し方を意識した。

7.3 評価法の問題点と対処方法

4コマのウェブクラスのうち、2コマは課題に充てた。定期的実施していた文法テストはGoogleフォームで作成した。テキストの練習問題や漢字練習は、初級レベルの学生の表記を確認する上で欠かせない課題である。これらの課題については、まず学生に完成した課題を写真に撮り、報告者のLINEに送るよう指示を出した。送られた写真を見て表記を確認し、タッチペンやメッセージ機能を利用して添削とコメントを残した。教師の立場からすると非常に手間のかかる方法だったが、スマートフォンひとつでできる負担の少ない方法は提出率を上げることに繋がる。また、アナログではあるが手軽にやりとりできる環境は、学生に「いつでも繋がっている」という安心感を与えられたのではないかと考えている。

7.4 学生の反応

同じ志を持つ仲間と留学生を送ってきた学生にとって、「学校」という場所は教師が考える以上に特別なものであった。通学時間や交通費がかからない点、感染リスクが減る点、そして後日行った学生アンケートで学校が取り組んできたウェブクラスに一定の評価が得られていたことは判明したが、それでもやはり教室でクラスメイトと一緒に授業を受けたという思いは強かった印象がある。

7.5 ウェブクラスのメリットとデメリット

ウェブクラスのメリットは、声が小さい学生の発

言も全体に聞こえるという点が挙げられる。教室では教師と学生の物理的距離の差は埋めようがないが、オンライン上ではそのような差は存在しない。また、Microsoft PowerPointを用いるときも、教室より近いため見やすくなる。デメリットは、授業準備と実施の負担が大きいことが挙げられる。また、インターネット環境と使用する機器がウェブクラスの質を左右するという点も大きな問題である。従来の対面授業では、教室にいる限りすべての学生は同じ環境下で授業を受けられるが、ウェブクラスとなると学生のインターネット環境が学習の効率を左右する。接続環境が整っていなければ、映像や音声資料が活用できない。スマートフォンやタブレット端末、パソコンといった使用機器によって見やすさも変わる。

7.6 まとめ

YDCは比較的早くウェブクラスを開始したが、周辺の状況を窺いつつ万全の体制を整えてスタートというよりは準備と実践がほぼ同時に行われた印象がある。2020年4月の緊急事態宣言で最も懸念されたのは、学校やアルバイト等の社会から切り離された留学生が精神的に不安定になることであった。そこで、自粛生活を少しでも明るく前向きに乗り越えてもらうことを目的に様々な動画を作成し配信した。対面授業再開後も、ZoomやGoogleフォーム、Google Classroomを使った授業や行事を行ってきた。

生活様式が大きく変化する中で教育機関も変化を余儀なくされたが、試行錯誤をするうち教師や学生の間でウェブクラスに対する抵抗が薄れ身近なものになった。また、密を避ける目的で行った学園祭のファッションショーや卒業式のオンライン配信は、結果的に海外に住む家族や卒業生の目に触れる機会となった。ICTの可能性に気づき、それを最大限に生かすことを視野にいれた取組みが今後も進んでいくことが期待できる。

⁷ 2020年4月17日に国立情報学研究所がオンライン開催した「第4回4月からの大学など遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」における鈴木克明教授（熊本大学教授システム学研究センター）の

講演「無理はしないで同じ形を目指さないこと：平時に戻るまでの遠隔授業のデザイン」より
https://youtube.com/watch?v=v_Wrmbngaoo&feature=share (2021.5.5 閲覧)

8.おわりに

本稿では、日本国内の各種教育機関における日本語授業の事例5件を報告した。前代未聞の状況において、それぞれが慣れないツールを駆使し、工夫を重ねていたことがわかる。最後に、オンライン授業のメリットとデメリットについて考察する。

まず、各事例で挙げられたデメリットをまとめると、1) 授業準備の側面、2) 授業展開の側面、3) 学生の立場からの側面、この3点に集約できる。1) の授業準備の側面については、すでに広く語られていることであるが、教師の授業準備が多岐であったことは複数の事例で挙げられている。2) の授業展開の側面に関しては、「学生の様子がわからない」「添削が難しい」「評価が難しい」という報告があった。特に評価については、対面授業で実施していた試験をレポートに替えたり、比重を低くしたりするなどの対策が報告された。これら授業展開に関する点については、今後検討が求められる重要な指摘である。

3) の学生の立場からの側面として、「人に直接会えない」「質問したい時にできない」などが挙げられていた。また、最も大きな問題だと思われるのは、「学生間のレベル差が開いた」という報告である。オンライン授業について学生や教師等の意見をまとめた日本大学FD推進センター(2021)によると、「授業を何度でも見ることができる」「学業に集中できる」というメリットと、「授業理解度の低下」というデメリット、この相反する意見が挙げられている。まさにこのような両極の反応が存在するため、結果的にレベル差が開くことになったのではないだろうか。オンライン授業では、声を上げない学生に対するアプローチが難しく、この点が大きな課題だと言える。

メリットは、1) 技術的な側面、2) 授業以外の側面、3) 学び方に関わる側面、の3点にまとめることができる。1) の技術的な側面としては、「画面共有することにより教員が準備した資料だけではなく学生の成果物をも容易に提示できる」「画面共有により学生にとって資料が見やすくなる」という点などが挙げられた。2) の授業以外の側面、つまり授業内容に直接関わらない点として、「通学時間や交通費の節約」「感染リスクの低下」が挙げられた。これは、日本大学の学生の意見でも挙げられており(日本大学

FD推進センター, 2021)、本稿の事例に限らず、2020年度のオンライン授業における普遍的なメリットだと言えよう。3) の学び方に関わる側面として、事例2において、異なる授業形態をブレンドしたことにより、一人で考えたことを同時双方向の授業で他の学生と共有することができ新たな考え方が得られた、また、事前に準備したことにより充実した話し合いが持てたという学生の声を紹介している。このような深い学びを得ることは、まさにブレンド型授業が目指すことであろう。2020年度は予期せぬ形でオンライン授業やブレンド型授業を余儀なくされたが、この経験は、対面授業を含めいかなる授業形態においても効果的な反転授業をデザインする糧になることと期待する。

以上、5件の事例をメリットとデメリットの観点から振り返ったが、最も大きなメリットは、教員としての成長が挙げられるだろう。授業の目標、内容、評価という本質をそれぞれが見直し、限定された状況で最も適切な方法を再構築したという経験は、教員としての成長につながるものであったと言えよう。

引用文献

- 鈴木克夫(2020)「遠隔授業の課題—制度の再構築を望む—」『IDE 現代の高等教育』vol. 623, pp.36-39
- 瀧川修吾(2021)「コロナ禍の「政治学」—オンデマンド型講義の実践例と考察—」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.21, pp.225-235
- 日本大学FD推進センター(2021)『令和2年度日本大学学生FD CHAmmiT NEWS LETTER』
- 保坂敏子(2020)「日本語教育における遠隔教育—オンライン授業のデザイン指針を探る—」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.21, pp.177-188

(Received: June 18, 2021)

(Issued in internet Edition: July 1, 2021)